
いざ往かん、第二生徒会 6

羽賀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いざ往かん、第二生徒会6

【コード】

N1086H

【作者名】

羽賀

【あらすじ】

第二生徒会の面々の前に現れたのは、風紀委員長であり、御堂の姉でもある御堂紅であった。彼女は告げる。『後三日の間に第二生徒会を解散しろ』と。彼女の言葉に悩む美水。翌日、出会った御堂は元気がない。首を傾げる美水の前にまたもや現れた紅は、彼女にまた告げる。『私の弟に近づかないでくれないか』……いまここに、読心ニュータイプ少女美水と、弟大好きおねえさん紅の、御堂と第二生徒会の存続を賭けた熾烈な戦いが幕を開ける！待望の（嘘）第二生徒会シリーズ第六弾です。

前編

「今日も、非常に暇だな」

「そうかな？ 僕は御堂君と同じ空気を吸っていられるだけで嬉しくてたまらないよ」

「そうか」

「ああ。……だから、今すぐ僕の胸に飛び込んできてくれないかな？
……あのな、霧島」

「なんだい？ ついに僕の愛を受け止めてくれる気になったのかい？」

「……俺はノンケだあああつ！」

放課後、第二生徒会室。開いた窓から飛び込んでくるのは軽音楽部のボーカル君のステキな歌声や、それに対抗するように発せられるコブシの聞いた声。演歌部だろうか。続いて何言っただかわからない勢いで叫びだすデスマタル部に、透き通った歌声はまるで僕らをどこか別の世界に連れて行ってくれるような聖歌隊同好会の歌。今日も、東成高校の校庭はフリーダムかつクレイジーです。

で、第二生徒会会長かつ、現生徒会長羽佐間杏子との熱愛疑惑に振り回されがちなシャイボーイこと俺、御堂は、残念ながら、非常に遺憾なことに、第二生徒会、そして東成高校が誇るイケメンかつガチホモ野郎な霧島冬哉きりしまとしやと二人きりの状況に置かれているのだった。霧島がわざとらしくブレザーのボタンを外しているのが気に触って仕方ない。これはあれか、誘っているのか？

「やらないか」

「随分とベタなネタで来たなおい」

「ふふふ、僕はノンケでもかまわず食べてしまう男なんだよ？」

「爽やかに笑いながら俺の両腕をホールドするのやめてもらえませんかね」

霧島はガムのCMにでも使えそうなくらい白い歯を見せながら爽

やかに笑う。そして俺の両腕はホールドされている。こいつ……やる気満々じゃねーか！ ほ、掘られる！

「おい待て霧島、マジで待て！」

「ダメだよ……君と二人きりの時点で僕はもう理性が抑えられないっ！」

「そこは抑えろよっ！ 美水よしみず、天宮あまみや、誰でも良い、早く助けにきてえええっ！」

荒い息で俺に近づく霧島の頭を必死に押さえつけながら、俺は悲痛な叫び声を上げた。

長髪美少女、だがその実態は俺の心を読めるニュータイプな美水か、役を作れば最強無敵、本当の人格はなくなっちゃったな天宮、どっちでもいい、二人がいればおそらく俺は助かるから！ 早く助けに来てよおおおおっ！

「誰か、マジで、ヘルプミー！」

「はあっ！」

すばすぱりん、とでもいうのだろうか。よくわからないが、そんな擬音が頭に浮かんだ。

俺の叫び声のすぐ後に、第二生徒会室のドアからいきりと刀の先っぽが生え出して、あっという間にドアがばらばらになったのだ。霧島はぽかんと口を開けてその様子を見ていたが、俺も同じようなものだろう。というか、誰があのだアの修繕費出すと思ってるんだ？ 勘弁してほしいんだけど。

六つくらいのパーツに分かれたドア、その残骸を踏みしめこちらに向かって歩を進めるのは、かなりの美少女。俺と交流のある美少女……、美水や天宮、羽佐間、彼女らもかなりレベルの高い美少女だが、この少女には今一歩劣るといっても過言ではない。なんとと言えば良いのか、彼女は風景とマッチしていない。あまりの美しさゆえに、一人だけその空間から浮いているのだ。長い髪の毛を背中辺りで一本に纏めている彼女は、優雅な仕草でその腕に握られている日本刀を腰に提げている鞘に仕舞った。いつも思うがこの学校って

フリーダム過ぎじゃないか？ 彼女の制服の左上、腕章には『風紀委員長』の文字。……と、まあ、こんな感じですごい美少女っぷりをアピールしたんですけどね？ この人さ、あれっすよね。俺はそろそろわからないと色々と面倒くさいことになるし……。

「おっと僕は急用を思い出したよH A H A H A」

「待て」

「いやああああ」

彼女の横を通り過ぎようとして、襟元を掴まれる。ぐえっ、と息が詰まりそうになる。容赦ねえよこの人！

「えーっと、離していただけませんか？」

「そうは行かないな。不順異性交友は校則により禁止されている」

えらい美人さん 風紀委員長 は、今だ呆然としている霧島

に視線をやってから、俺に向き直って言った。心なしかその眉は釣り上がっている。

「あのですね……こいつは男！ よく見てくださいよ！」

「ふむ、それならば君は同姓と不順交友を行っていたことになるな

……。風紀委員長として、そんなことは見逃すわけには行かないな

「あんた本当は別に風紀委員長とか関係ないだろ！」

俺は彼女に向かつて吼える。その様子を見て、ようやく正気に戻った霧島がおずおずと口を開いた。

「えっ、と……、御堂君、そちらの方は……風紀委員長の御堂紅さ

ん、だよな？」

「いかにも、私が御堂紅だ。弟が世話になっっているようだね。……

とはいえ、風紀委員長として不順異性交遊は見逃せない。わかって欲しい」

「は、はあ……。って、え？ 弟？」

「ああ、そうだ。これ……御堂京は私の弟だよ」

「なんてこと、先輩、御堂委員長と関係ありまくりじゃないですか」

「うそつきー」

「うお、お前らいつの間に」

背後から聞こえてきた声に振り向くと、用事を終えたのだろう、美水と天宮の二人がいた。来るのおせーよ！ 後何分か早く来てくれていれば……姉貴に捕まることはなかったというのに！ くやしいつ！ でも感じちゃ（以下省略されました）

「ふむ、君達は確かこの出来ない弟と共に第二生徒会とやらに所属しているという……」

「美水伊織いおりです。御堂先輩には、お世話になってます」

「天宮はるかです。御堂先輩、すごく優しくしてくれますよ」
「なるほど。……相変わらず女性には甘いな、弟よ」
ほつとけ。

「さて、ちょうど第二生徒会の面々が揃ったようだから、伝えておかねばならないことがある。少し時間を頂くよ」

「ええ、構いませんが……」

美水が頷き、我が姉に椅子を勧める。彼女はそれを丁寧に断った後、ゆっくりと口を開いた。その間、俺の首元は掴まれたままだ。いい加減離して欲しい。

「君達第二生徒会是我が東成学園の風紀を乱す存在と認定された。

よって、本日より三日の間に、第二生徒会を解散させてほしい」

「はあっ！？ 何言ってるんだよ姉貴！ 俺達が風紀を乱してるなんてありえないだろうが！」

「そうかい？ 私は第二生徒会の面々が生徒会に悪質な投書を繰り返していると聞いているのだけれどね」

「ぎくっ」

明らかにうるたえる俺の姿に、姉貴ははあ、とため息を零した。

「私としてもこの第二生徒会を潰したくはないんだよ。しかし、これは生徒会が決めたことだからね」

「畜生やっぱり正男まさおと愛美まなみの仕業かよ！」

姉の口から出てきた生徒会という単語。思い当たるのは我が天敵俺が生徒会から姿を消すこととなった元凶、沼口正男ぬまぐちと竹元愛美たけもとの二人しかいない。あいつら、俺が羽佐間を奪ったことまだ根に持つ

てやがるのか……。

「別に先輩が会長を奪ったわけではないと思いますが」
「うっせー」

俺の心を読んだのか、美水が口を挟む。こいつの特技は俺の心を読むことで、趣味もまた俺の心を読むことだ。そんなこいつに対抗する手段は一つ……。

（『本当にいいんだな、美水……』 『先輩と一つになれるなら……私……』 顔を真っ赤に染めた美水が、ゆっくりとワイシャツのボタンを外していく。速度は遅いものの、確実に視界に映るようになってきた美水の白い柔肌に、俺はゴクリと喉を鳴らした。美水は相変わらず顔を逸らしたままだ。こいつがこんな姿を見せることは珍しい。……俺は美水の顔が見たくなって、彼女の細い顎に手を伸ばした。『や、先輩……』 『かわいい顔なんだからさ……。ちゃんと、見せてよ』 俺の言葉にこくりと小さく頷き、美水は正面を向いた。潤んだ瞳には俺の顔が映る。もう、我慢がならない。『ごめん、美水……もう、無理っばい』 『え、何を……ひゃうんっ！』 俺は唇を美水の首元に落とし、その白い肌に口付けた。右手は彼女の体を下に滑り降りていく。臍を抜け、そして俺の手は

「は、ははははは破廉恥ですっ！」
すぱこーん、と美水の振るったパイプ椅子が俺のこめかみにクリンヒット。空中できりもみ回転しながら、俺は部屋の壁へと激突した。痛みで意識が飛ぶ直前、見えた美水の顔はこれでもかというほど赤かった。……作戦、成功だな……。げふっ。

「……美水君といったね」
「は、はい」

「……君は常にこのような暴力を？」
「あ、いえ、その……一週間のうち、七日ほどです」
「それは毎日というんだよ……。まあいい、弟にも悪いところがあるが、すぐに力に頼るのは感心しないな」

「すみません……」

(す、すごいです……。あの美水ちゃんが頭を下げているなんて……)

(恐るべし、風紀委員長御堂紅といったところかな……)

「なにか？ 霧島君に、天宮さん」

「いえっ、なにも！」

「……ふう」

「お目覚めかい、弟よ」

俺が目を覚ましたのは、どうやら保健室らしかった。白い天井と、カーテンの引かれたベットが見える。加えて、保健室特有の匂い。疑うことなく、保健室だ。

俺はいくつかあるベットのうちの一つに寝かされており、枕元では姉貴 御堂紅が腰の愛刀をとんとんと指で叩きながら俺を見下ろしていた。

「……おひさー」

「まったく、久しぶりだね。……君が家を出てから二年か」

「まあそうだろうね」

「……学校では意図的に私を避けていたようだし……、ようやく会話する機会が巡ってきたということかな」

姉貴は寂しそうな笑みを浮かべて、言った。二年前と変わらないな、この人……。ということは、あの家族も変わってはいないと言っことなんだろう。嫌だなあ……。

「……寂しかったんだからね……お姉ちゃんは……ずっと、ずっと……」

「う……」

ああ、俺の危険察知センサーが警鐘を鳴らしている！ 『お姉ちゃんモード(命名俺)』が発動した姉貴は、やばい、いろいろとやばい。どうやばいかを具体的に言っと、まず服を脱がされる。その後、姉弟といえど過剰すぎるスキンシップの嵐が待っている。マ

ジ勘弁してください。

「……学校では話しかけてくれないし……お姉ちゃんは毎晩濡らしてたんだから……」

「おい！ やめろ！ その台詞は非常にまずい！ 頼むから枕であつてほしいんだけどどうでしょう!？」

「……」

「その沈黙は何だよ！ おい、弟をネタに自分を慰めてたとかないよな!？ ないよね!？ 答えてお姉様!」

姉貴は顔を真っ赤に染めて俯いてしまった。俯きたいのは俺の方です。

どうしてこう、俺の一家は変態しかいないのか……。

「と、とにかく! 今日と一緒に寝ようね!」

「寝ねえよ! 何でそんな話になってんだ!」

「寝てくれるでしょ? ミヤは優しいから」

はい

いいえ

「そんな……ひどい……」

はい

いいえ

「そんな……ひどい……」

「なんでだよ! 無限ループか! やべええ! ローラ姫こええええ!」

「ふふ、目には目を、強情な弟にはローラ姫を、よ」

「初耳だよそんな格言! ハンムラビ法典に載ってるのか!」

「やっときましたね。おめでとう。このゲームを かちぬいたのはきみがはじめてです」

「ゲーム? じゃねえよ! 姉貴、しっかりしろよ、あんたなんだかおかしいぞ!」

「ああ、ミヤが私の心配をしてくれているなんて……」

「あああああ！ もう、鬱陶しいいいいい！ 早く委員長モードに戻れよ戻ってお願いします戻ってくださいいいいい！」

「……仕方ないな……ミヤがそう言うなら……戻ろうじゃないか」切り替えが早い人だぜまったく。

俺は深いため息を吐いた。姉貴に絡まれた以上、これから先ずつとこんなノリの生活を送ることになるだろう。……嫌だなあ。

「で、姉貴は何の用があつて俺たちのところに？」

「……さっきも言ったように生徒会からの要望でね。第二生徒会を解散させてほしい。風紀を乱す要因を見過ごすわけにはいかないんだ」

「……乱してないっての」

「それともう一つ……ミヤが他の女の子と仲良くしてるのは見たくないんだもん……」

「個人的なやつかみかよ！」

「そうよ！ それの何が悪いのよ！ ミヤは私だけのものなんだから！ 誰にも渡さない！」

「またお姉ちゃんモードかよ！ 落ち着け！」

「女にはね……絶対に退いちゃいけない時が三つあるの。一つは男に迫る時、もう一つは婚姻届に印鑑を押させる時。最後は……好きな弟が他の女に取られそうになった時よ！」

「初耳だよ！ だから落ち着け！ 台詞しかないのは駄作と思われらつて！ モノローグを入れさせる！」

「ううう……」

「やっと落ち着いたか……」。

姉貴は瞳を潤ませて、口をつぐんだ。だが、その目が何かを語っている。

『キスしてくれたら、お姉ちゃん嬉しい』

「するか！」

「なんで！？ お姉ちゃんは一杯してあげたのに！」

「それはあんたが勝手にやったことだろうがああああ！」

「ひどいよミヤあ……」

あんなの方がひどいわ……。

「……うう、とにかく、第二生徒会は解散だからねっ」

「おい、なんでそうなるって、ちよつと待てえっ！　なぜ逃げるか

！」

「ミヤ、愛してるからねええええっ！」

「大声で叫ぶなああああああ！」

姉貴はものすごいスピードで保健室から走り去ってしまった。

……ほんと、なんなんだあの入。

「……帰ろっ……」

どつと、疲れがたまっている気がする……。こつこつ日は、早く寝るに限るよな。

窓から見える夕日は、すでにその役目を終えようとしていた。もうすぐ夜がやってくる。

俺は近くに置かれていた鞆を手に取り、保健室を後にした。

「おかえり、ミヤー！」

「迂闊、超迂闊……」

「えへへ、どう？　裸エプロン。似合う？」

「ふ、学生証がないからおかしいとは思っていたが……盗られていたとはな……」

「ねえねえ、裸エプロン、どう？」

「……住所載ってるしな……ああ、俺の馬鹿……」

「もうっ！　ミヤってばあっ！　えいっ！」

「だあああ！　うっさい！　……って、何で裸になってんだよ！

エプロンつけるエプロンんっ！」

「もう、真っ裸はロマンがない、やはり着衣するのが一番だ、なんて……エッチなんだから」

「その言葉そのままそっくり返すよこんちくしょっつっつっつっつっつっつ」

「……………」

「……はい、チエックメイトです」

「ふえ〜ん、美水ちゃん容赦なさ過ぎだよ〜」

「ゲームといえど、手を抜かないのが私のポリシーです」

「うう……………」

「それにしても……………」

「……………どうしたの？」

「あれ、見てください」

放課後の第二生徒会室。チェス盤を挟んで天宮と向かい合っていた美水は、二人から少し離れた窓際で力なく外の景色を見つめている御堂を指さした。次いで、天宮も視線を御堂へと向ける。ぼんやりと外を眺めつつ、その口から出てくるのは無言のため息のみ。

いつもの御堂とは思えない大人しさに、二人は胡乱げな視線を彼へと向けた。

（なにか、あったのかなあ）

（どうでしょう。……………いつもと違ってなんだか微妙にやりにくいのですが）

「すまない、遅れたね」

ひそひそと二人が話し合っているところで、ドアを開けて登場したのは霧島であった。彼はそばにいる二人に視線をやり、次に窓際の御堂を見た。

（御堂君、何かあったのかい？）

（さあ。そのことについて話していたところですが）

（どうしたんだろ……………。やっぱり、第二生徒会解散についてのことかなあ）

天宮の言葉に、二人が暗い顔を見せる。今さっきまでチェスを行っていたとはいえ、昨日紅から伝えられた言葉は美水の心の中に尾

を引いていた。むしろ、チエスをすることでそれについて考えないようにしていたに過ぎないのだ。

第二生徒会を失うということは、美水にとって御堂との繋がりを失うのと同義である。

自身の学校生活の中心に存在する御堂を失うのは、非常に心苦しい。

以前、御堂が記憶喪失になった時のことを思い出し、美水は少し落ち込んだ。あの時、御堂が自分を忘れたことが非常に悲しかったのだ。第二生徒会を失えば、彼は日々の流れのうちに自分のことを忘れてしまうのではないか……。そう思うと、とても辛い。

改めて、御堂の存在が自分にとって非常に大きいことを美水は再確認したのであった。

「……御堂先輩……」

「……私がどうかしたかな？」

「え？」

呟いた美水の背後、音もなく部屋に現れ、彼女を見下ろしているのは風紀委員長・御堂紅であった。切れ長の瞳から覗く眼光が、美水を射貫く。その冷たさに美水は思わず背筋を震わせた。

この女は、私を敵視している……？

確信とも言えるような予感が、美水の頭に浮かぶ。

そうでなければ、こんな冷たい目で何も思っていない他人を見ることなんてできないだろう。

「御堂風紀委員長……」

「美水君だったね……。私の弟を見ていたようだが、どうかしたかい？」

「御堂先輩が、いつもと違う様子でしたので……」

「なるほど。心配だったと……」

「い、いえ……それは……」

紅の言葉に、美水が狼狽える。正論であるが、面と向かって言われると、非常に気恥ずかしい。

「なに、照れることはない……。君も年頃だろうしね」

「いえ、ですから私は御堂先輩には別に……」

「……何も思っていないと?」

「……それは、その……」

美水の言葉が濁る。

御堂に対し、好意を抱いていないと言えば嘘になる。だが、それを言葉にするのは……少し難しい話だった。

「……ならば、姉として……いや、一人の女性として言わせてほしい」

「なん、ですか……?」

「これ以上、私の弟に近づかないでくれないか?」

これ以上ないくらい冷たい声で、紅が美水に囁いた。

「……!」

「……弟には、もっと相応しい女性がいるはずだ……。私のように、ね」

「なん……」

「それでは失礼しよう……。解散の話は、忘れないでおいてほしいね」

紅は優雅な笑みを浮かべ、最後に美水を一瞥し、第二生徒会室を去った。

「……」

「美水ちゃん?」

「はるかちゃん、今はそつとしておこう。……美水さんの思いが纏まるまではね」

霧島の言葉に天宮は頷き、二人はゆつくりと美水のそばを離れた。そんな二人の動きに気づくこともなく、美水はただ、先ほどの紅の言葉を反芻していた。

『これ以上、私の弟に近づかないでくれないか?』 『もっと相応しい女性がいるはずだ……』 『私のように、ね』

……確かに、御堂は女好きで、馬鹿で、変態ではあるが、彼の良

いところを、美水は何個も知っている。長年同じ時間を過ごしてきたであろう姉の紅には劣るかもしれないが、それでも、美水は短い間ながらも濃密な時間を過ごしてきた。そして、御堂に好意を抱いた。

今まで、誰かを好きになるなんてことはなかった。

自分が好意を抱ける人は、おそらく現れないだろうとまで思っていた。

しかし、美水は御堂に恋をした。『好き』なんてものじゃないかもしれない。『愛している』と言っても過言ではないくらい、近頃は御堂のことばかりが頭に浮かぶ。

女性に声をかけてばかりで、それでもなぜかモテて。生徒会長の羽佐間や、同じ第二生徒会の天宮も好意を抱いているライバル同士だ。皆手強い相手ではあるが、絶対に負けられないと思っていた。

いつか彼の隣で、共に笑いあいたい。彼のために、自分が何かしてあげられることは……？

そう、考えていた。

でも、彼の姉である紅は言う。御堂に近づくな、相応しいのはこの私だ、と。

ふざけるな、と思った。御堂に相応しい女性は、御堂が決めること。自分たちが決めることじゃない。大事なものは、御堂に相応しい女性になれるように努力することなのだから。

それに、姉だからと言って、何でも許されると思ったら大間違いだ。御堂が嫌がっていない以上、自分は絶対に御堂の側を離れない。『相棒』の名は伊達でないことを、見せてやらなければ気が済まない。

……幸いかどうかはともかくとして、紅は御堂に対して、姉弟以上の感情を抱いている。それならば、おあつらえ向きの戦場フィールドがあるではないか。

御堂争奪戦。

これは戦争だ。御堂を賭けた、自分と紅の戦争なのだ。

第二生徒会の進退について、白黒はつきりさせるチャンスでもある。

やるしかない。あの人のことだ……乗ってこないはずがない。

（私はやります。必ず、あの女に勝^{ひと}ってみせる。そして……」

御堂は、今も元気なく窓の外を見ていた。今ならわかる。彼があなつたのは、あの姉が原因だ。

（御堂先輩……。必ず、あなたの笑顔を取り戻しますから）

美水は誓った。

自分のため、第二生徒会のため、そして何より……愛する人、御堂のために。

前編（後書き）

お久しぶりです。

作者の羽賀です。中間テスト終了後、しばらくネットからは遠ざかっていたのですが、久しぶりに続編の投稿と相成りました。

今回は第二生徒会シリーズ初の連載形式でお送りします。といっても前後編の二話で終了ですが。

今回は自分のやりたいようにやったため、滅茶苦茶なストーリーなのですが……。

いかがでしたでしょうか。

今回は始めて御堂の名前と、美水の名前が明かされました。そして前回登場した御堂紅。御堂が関与を否定したくのもわかるくらい強烈なキャラだと思います。それ故に作者としてはお気に入りなのですが。

とまあ、あとがきはこれくらいにして、と。

次回の後編もお楽しみに。

……どうでもいいかもしれないんですけど、どなたか登場人物のイラストを書いてくださる方いらっしやいませんか。御堂を踏む美水が見たくて仕方ないのですw

もし描いてもいいぞと仰ってくださいる方がいたら非常に嬉しいのですが。ええもうそれは画面の前でドジョウ掬いするくらいにw

それでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1086h/>

いざ往かん、第二生徒会 6

2010年10月10日05時30分発行